

< 海外情勢 >

「地獄に突き落とされる朝鮮半島」

平昌五輪以降、北朝鮮の活発な外交が目立つ。

4月27日に予定されている南北会談、そして来月行われる米朝首脳会談。

先月末には金正恩の電撃的北京訪問もあり、数年間続いていた朝鮮半島情勢の緊張がゆるみつつある。4月1日に始まった米韓合同軍事演習も期間は去年の半分。米空母の派遣も見送りとなった。朝鮮半島はこのまま安定化に向かい、南北統一の日も遠くはない。そんなことを夢想したくなるが、現実はそれほど甘くない。

半島はこれから地獄の苦しみを味わうことになる。その影響は当然のことだが、わが国を直撃する！

▼ 94年核危機を再考する

北朝鮮をめぐる緊張は2006年10月の「北朝鮮最初の核実験」、あるいは1998年8月に日本列島を越え太平洋に落下したミサイル「テポドン1号発射」に始まった。いずれも金正日総書記の時代の話だ。北朝鮮をめぐる緊張の流れを理解するために、1994年（平成6年）の「朝鮮半島核危機」を見直してみよう。

韓国、北朝鮮は1991年に「朝鮮半島非核化」に関する共同宣言を行ったが、その後も北朝鮮が核開発を続けている雰囲気があった。1993年2月、IAEA（国際原子力機関）が北朝鮮に特別査察を要求。北朝鮮はこれを拒否し、翌3月にはNPT（核拡散防止条約）からの脱退を表明。5月には中距離ミサイル「ノドン」の発射実験を行った。

この状況下、米クリントン政権は北朝鮮の核施設である寧辺を空爆することを極秘に決定。同盟国である日本と韓国にその決定を通知した。

日本は非自民の細川連立政権の時代だった。米国の北朝鮮空爆決定に対し、日本では内閣官房を中心に防衛庁・警察庁等々が協議を重ね、米軍による北空爆開始と同時に日本海沿岸を自衛隊や海保・警察が固め、難民保護・難民隔離の要員を張り巡らす。同時に政府から非常事態宣言が出され憲法が停止、超法規的措置がとられる準備が進められた。

だが韓国の金泳三大統領の必死の説得・懇願により、米国の北空爆は中止され、翌年のカーター元大統領の平壤訪問となる。

カーター元大統領の訪朝により北朝鮮の核開発を凍結・停止させるという案は、すでにレーガン政権下で考えられ始めたもので、1991年にはブッシュ（父）大統領時代に具体的な計画として実現間際まで練り上げられた。

それが諸般の事情で実行されなかったが、朝鮮半島核危機が到来した1994年6月に実現の運びとなったものだ。6月15日、南北の軍事境界線を越えてカーター元大統領が北朝鮮に入り、平壤で2日間、延べ10時間に及ぶ「**カーター・金日成会談**」が行われた。この10時間の会談の間、金日成は終始おだやかな笑顔を絶やさなかったと伝えられる。

金日成はこのとき既に黒鉛減速炉の廃棄、それに代わる軽水炉建設の道筋を見据えていた。それだけではない。中国の鄧小平の改革開放経済にならい、北朝鮮の門戸を開き「**ふつうの国**」に向けて舵を大きく切ろうとしていたのだ。金日成はカーター大統領にこう語った。「半島がゆるやかな連邦制となった暁には、在韓米軍が北朝鮮にやって来ることも問題ではないのです」。

▼ とつぜん訪れた「金日成の死」。

そして北朝鮮は「ならず者国家」に…

金日成は北朝鮮を「ふつうの国」にしようと考えていた。だがその道はとつぜん閉ざされた。カーター元大統領との会談から3週間後の1994年7月8日午前2時、金日成は急逝した。82歳。過労による心筋梗塞と説明されている。死亡したとき、金日成の首の後ろにはゴルフボール大の肉腫ができていたとも語られている。

本当は、どうだったのか。世界中の情報通の多くは「**暗殺された**」と考えている。証拠はない。通説として「**暗殺**」とされているだけだ。世界中の事情通の中で、発表通りに金日成が心筋梗塞で死んだと考える者は、皆無に近いだろう。

では誰が暗殺したというのか。幾つかの説がある。いちばん有力な説は、金正日犯人説だ。次に、北朝鮮政府中枢に潜む中国勢力による暗殺説。他には金策の流れを汲む反金日成派が手を下したなど、幾つかの説がある。

「**金日成主席の後継者は誰か**」カーター元大統領の質問に金日成は「**金平一**」と答えたという。実際、日頃から金日成は「**自分の後継者として、党は金正日に…軍は金平一に…政治は金英一に…**」と発言していた。自分の後釜として金平一を指名したことは不思議ではない。

金平一とは金日成の息子で、金正日の13歳年下の腹違いの弟。駐ユーゴスラビアや駐ハンガリー大使として活躍し、東欧圏ではよく知られた国際事情通。金日成の葬儀の際には駐フィンランド大使として帰国して葬儀に参列したが、公式記録からは抹殺されている。現在は駐チェコ大使である。

金正日から金正恩からも疎まれ、監視され北朝鮮に帰国もできない状況にある人物だ。自分の弟である金平一が後継者になることが嫌で、金正日は父親を殺したとの説もある。このとき金日成の側近6名が同時に死んでいるが、殉職したとの噂もある。だが、金日成暗殺には他にも説がある。

北朝鮮が米国の言いなりになって核開発を放棄し半島統一を目指し、在韓米軍が北朝鮮の奥深くまで侵入してくることは、中国にとっては許されるものではない。

半島全域が米国の管轄下に置かれることを中国が黙認するはずはない。北朝鮮中枢の親中国派が金日成を抹殺したとの説も根強い。まだ他にもある。

金策一派による暗殺説だ。金策とは金日成の同士として抗日パルチザン戦、そして朝鮮戦争を戦った北朝鮮の英雄。通説では1951年に朝鮮戦争で戦死したことになる。だが金日成自身が著書で「過労による心臓麻痺だった」と記すなど、変死の疑いがもたれている人物。中国共産党員でもあり、親ソ連派の金日成と対立したとも噂される。

さらに金策の正体は日本人・畑中理であり、大日本帝国陸軍が米国・中国を相手に戦うために、北朝鮮に残した工作員だったとの話もある。

(詳しくは『金正日は日本人だった』佐藤守著／講談社 2009年をご参照ください)

どれも確証のない情報ではあるが、単なる作り話と捨て去ることができない説得力を持つ。真相は闇の彼方だが、明確なことが一つある。金日成が急逝したことで「ふつうの国」を目指していた北朝鮮が、凶悪な「ならず者国家」に変身してしまったことだ。

▼ 金日成同様に「ふつうの国」を目指す金正恩を待つもの

文在寅大統領との南北会談(4月27日)、トランプ大統領との首脳会談(5月中)を通して、北朝鮮は段階的核放棄を受け入れる方向を示しつつ、実際は核を放棄しないだろうというのが一般の見解だ。中国の習近平主席は金正恩に対し「段階的で同時並行的な核廃絶方式」を提唱し、金正恩も同意したと伝えられる(新華社電)。

日本のマスコミや評論家だけでなく、世界の多くがこうなるものと考えている。だが金正恩の発言のすべては、明確に「核の完全放棄」を示しており、米トランプ政権も「一括妥結方式」(核とミサイルを同時廃棄)を求めている。

金正恩は「高麗連邦共和国」を視野に入れ、米国の提案を受け入れ、リビアのカダフィが選んだ道を進もうとしている。高麗連邦共和国とは金日成が提唱した「朝鮮半島の統一」を目指す「ゆるやかな連邦制」である。

1989年11月にベルリンの壁が崩壊。翌1990年3月に東ドイツで選挙が行われ、東西ドイツ統一の道が開かれ、その年の10月にドイツは統一された。この統一の過程を北朝鮮も韓国も、現地に調査員を送り細部まで熟視した。東ドイツは東欧圏では最も開放的・自由主義的な経済が発展した国だったが、統一後には東西の格差のため、塗炭の苦しみを味わった。東ドイツでは失業者があふれ、西ドイツは経済混乱のため日本円換算で3兆5,000億円が吹っ飛んでしまった。

南北朝鮮が統一するとなると、間違いなく東西ドイツ統一を遥かに超える経済的苦境が出現する。そのカネ不足はとりあえず隣国（日本）から取り立てるとしても、文化的差異を埋めるには10年20年を要する。言語一つにしても、韓国と北朝鮮では微妙に異なる。「李」を「イ」と読む韓国と「リ」と読む北朝鮮の差からもそれが理解できる。地域差別の問題も残る。それを理解して、金日成は「ゆるやかな連邦制としての高麗連邦共和国」を提唱したのだ。金正恩は世界史に名を残す偉業として、金日成の夢だった「高麗連邦共和国」の建国を目指している。

3月末に電撃訪中し習近平国家主席と会談したことは、金正恩の並々ならぬ意欲を示している。金正恩訪中に関しては日本のマスコミも大々的に扱ったが、同行者として目についたのは李雪主（リソルチュ）夫人ばかり。金正恩が夫人を同行させたのは、いわば手品使いが振りかざすハンカチで目くらましのようなもの。

同行者の分析に目が集まらないように配慮した結果である。

金正恩と同行した顔ぶれは、崔竜海・朴光浩・李洙墉・金英哲といった北朝鮮では知られた大物政治家に加え、李容浩外相や趙甬元・金成男・金炳鎬など党の副部長が並んでいた。だがここに、軍人の名は一人も入っていない。

叔父である張成沢を処刑して以来、金正恩は中国と関係しているとみられる党中央や軍人を1,000人以上粛清したと思われるが、朝鮮人民軍軍部には中国と密接な関係を持つ機械化軍団や戦車軍団が存在する。これらの軍団は旧瀋陽軍区で中国軍と合同軍事訓練を行っているのだ。親中国派はすべて粛清されたとの説もあるが、それは間違った情報である。実態が見えない北朝鮮の内側ではあるが、金正恩体制が一枚岩ではないことは確かだ。カーター元大統領と会談した祖父の金日成の時代と、深奥は変わっていない。

▼ 逃げ場を失った北朝鮮と金正恩

金正恩は12歳か13歳になった1996年頃、スイスのベルン市の国際学校に通っていたとされる。その後もスイスだけではなくドイツや東欧で学び、16歳か17歳になった2000年に北朝鮮に帰国したとされる。様々な説が流されているが、確定情報はない。情報が漏れないところに北朝鮮の凄みを感じるが、この外国留学中に「帝王学」を学んだことは間違いない。一般に「愚かで過食症の刈り上げ」と評されているが、頭脳明晰学力優秀、外交戦略のセンスは超一流だ。

金正恩留学前後から、北朝鮮は東欧中心に毎年1,000人単位で人材を送り込み、最新科学だけではなく芸術まで学ばしている。彼らの中から選ばれた人々が金正恩のブレーンとして活躍しているのだろう。

平昌五輪の乗っ取り方や文在寅大統領の扱い、電撃的訪中、さらには李容浩外相の訪口などは、緻密な計算から生まれた「最善の方策」と考えられる。

どんなに金正恩が、あるいは北朝鮮政府のブレーンが優秀でも、北朝鮮はどん詰まりの位置にある。土俵際いっぱい、徳俵の上。首の皮一枚だけ残した状態にある。5月の「金正恩・トランプ会談」で、トランプの思惑通りに一括妥結方式に同調し、北朝鮮が核廃棄の方向に進めば、金正恩が暗殺される可能性が高まる。

逆に、トランプの思惑に従わなければ、夏前にも米軍による北朝鮮攻撃が行われるだろう。金正恩北朝鮮はついに最後の最後、どん詰まりの状態に来てしまった。もはや逃げ場はない。北朝鮮情勢はどう転んでも今夏には、全体状況が見えるところに転がり込む。それは残念ながら、半島を地獄に叩き込むことになる。

その地獄を横目で見ながら、日本は何をするのだろうか。